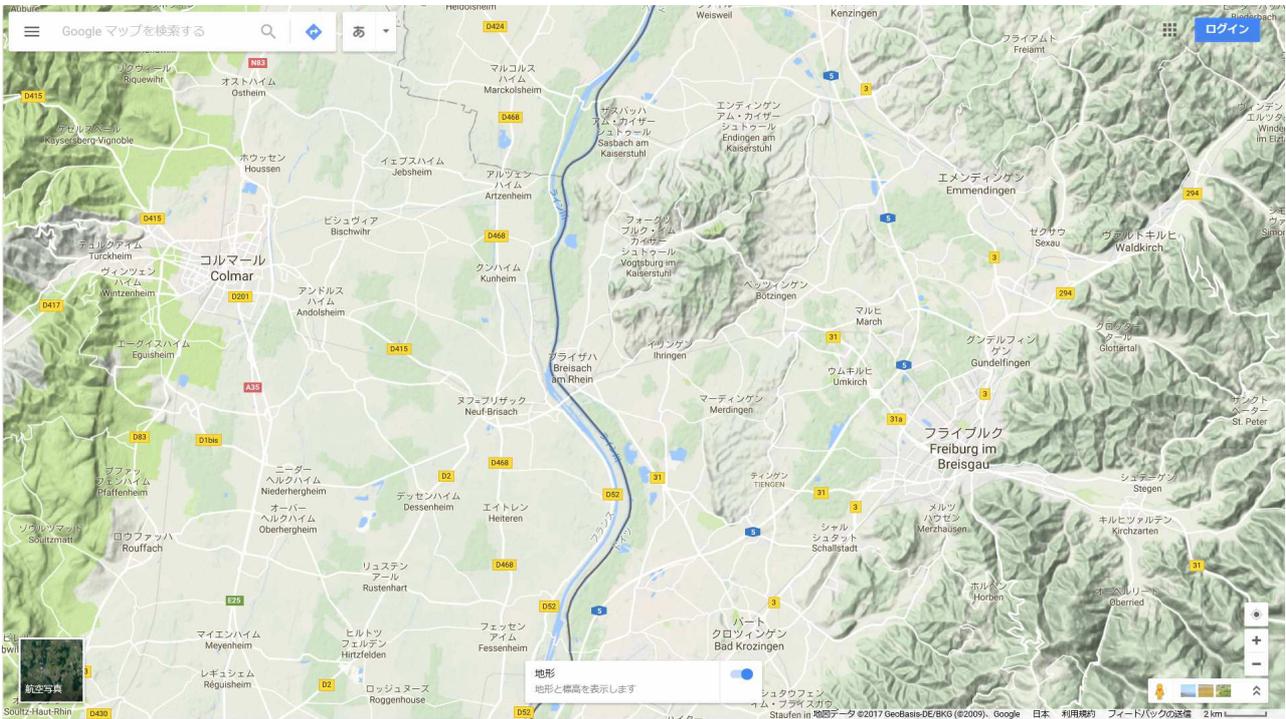


フライブルクとコルマール Freiburg im breisgau & Colmar

地図1 中央をライン川が北流。東側(ドイツ)にフライブルク、西側(フランス)にコルマール



フライブルクはドイツ南西部バーデン・ヴュルテンベルク州にあって人口 22 万の地方都市である。その西方、ライン川を越えたフランス領アルザスに人口 7 万の地方都市コルマールがある。この独仏国境地域は過去数世紀、両国の領土争奪と編入の歴史を繰り返してきた。また言語境界でもあるため、複雑な事情を抱えて来た。その一方、文化的には多様性に富んだ地域とも言える。

初めてフライブルクを訪ねる

1977 年夏の私の最初の海外旅行では、ヨーロッパの特にドイツの街を多く訪ねた。北のリューベックから始まったドイツ縦断はバイエルンの都ミュンヘンから一度アルプスを越え、南のイタリアに赴き、そこから北へと反転し、雄大な景色のスイスを列車でめぐり、ジュネーヴ、ローザンヌ、ベルンそしてバーゼルを訪ねた。そこまで来れば、このライン川沿いの街を北に抜けるとドイツに再入国することになり、最初に降り立ったのがフライブルクだった。

この街に立ち寄ったのは、「自由の街」を意味するその名にひかれたせいもあるが、歴史と伝統の重みそしてよく保存された旧市街を、



写真1 街中を流れるベツヒレ

散策する楽しみがあったからだ。大学町そして宗教色の濃い都市でもある。さらにこの街がユニークなのは、街中に張り巡らされ今もそのままの、ベッヒレ(Bachle)と呼ぶ用水が流れていることだ。街中に用水が流れている街として、島根県の津和野を知っていたが、フライブルクのそれは子供がまたいで渡れるほど小幅で、しかも浅い流れだった。市中心部の南を流れるドライザッハ(Dreisach)川は、西流しライン川へと注ぐ。そのドライザッハ川の水を分水し市中心部へと導いている。水路は大小様々な街路を、隅に寄ったり真ん中を貫いたりして、西へと流れて行く。その延長は15kmにも及ぶという。その昔、防火と街路清掃のために導入されたと言うが、その役割が小さくなった現代でもベッヒレは健在である。

8月後半のある日の午後、駅からその前の通りを行くと、途中の大通りを越えた所で道が狭くなり旧市街へと入った。ここではすでに通りの中央にベッヒレが流れていた。それに沿って歩くと、今度は左手に市役所前の広場が見えて来た。ここにも広場の二方を縁取るようにベッヒレが流れる。さらに進むとこの街のメインストリート、カイザー・ヨーゼフ(Kaiser-Joseph)通りに達する。自動車交通を締め出した大通りには歩行者が行きかい、そこをゆっくりとトラム(市電)が走っていた。南に見えるのはマルティン門。ごつつい石造りの塔は、13世紀初めに要塞の塔として建てられたもので、地上に穿たれた大きなアーチをトラムがくぐって行くのが見えた。街を華やかにしているのは、所々に花壇を設け、そこに植えられたゼラニウムなどの花々。楽しい散策が続いた。

その名もミュンスター通りという小路を入ると見上げるようにこの街のミュンスター(大聖堂)が見えて来た。このライン川流域に

造られた他の聖堂と同じく、造りは赤い砂岩(Roter Sandstein)を積み上げたもので、塔頂には網目状の尖塔が聳えている。この塔の美しさを「ルネサンス」という言葉の産みの親で歴史家のヤコブ・ブルクハルトは、キリスト教会随一と讃えているが、言われるまでもないと思った。この大聖堂前のミュンスター広場に面して、歴史的な商業会館(Historische Kaufhaus)が立っていた。1階はアーケードで2階の外壁が見ものだ。窓と窓の間には、騎士の立像が並ぶ。そして両端には円筒状の出窓が広場へと張り出ている。それを支える円錐状の天井。とても精巧な作りで、見応えがあった。



写真2 大聖堂前広場の泉 奥に歴史的な商業会館

カイザー・ヨーゼフ通りに引き返すと、角っこに大型の書店があった。大変な賑わいで、しかも奥には学術書なども多く、これもこの街が大学町であることの証しなのではと思ったりした。次に入ったのは生活雑貨を扱う店だった。旅の途中で歯ブラシを忘れて来た。そこで探して見た。若い店員に英語でトゥースブラッシュ(toothbrush)はないかと、磨くジェスチャーまでして尋ねるが、分かってももらえない。この時は諦めたが、歯ブラシはドイツ語でツァーンビュルステ(Zahnbürste)だった。それが言えていけば・・・。

その足で来た道に戻り、鉄道駅に戻った。

この日は、すでに訪れていたハイデルベルクが気に入ったのでもう一度宿を取ろうと、鉄道で北へと向かった。コンパートメントで一緒だったのは、米軍の黒人兵で、その後も彼らを旅で時々見かけたが、大きなステレオラジカセで R&B を流しながらリズムをとっていた。この先、フランクフルト周辺には米軍基地があるはずで、彼はそこに帰る所だった。

アルペン街道の旅の後で

時が流れ 1998 年の夏、ドイツ中心に旅をし、アルペン街道を街中の壁絵を求めてオーストリアやスイスにまで足を運んだ時、再びスイスのバーゼルからフライブルクへとやって来た。この時は、車での家族旅行だった。スイスの国境を抜けた時、ラインの両岸が遠くまで開けその平野に車線を広げたアウトバーンが真っ直ぐに伸びていた。おかげで国境から 1 時間も経たずしてインターチェンジのフライブルク中央に達し、一般道へと出た。ALTSTADT(旧市街)の看板を頼りに都心に近づく。そして駅近くのツーリスト・インフォメーションにやって来た。

ベビーカーを出し二歳に満たぬ長女を載せ、長男には歩いてもらい、インフォで今夜の宿をあっせんしてもらおう。あいにく都心は満杯で紹介されたのは北に数キロ行った街道沿いのホテルだった。車で 10 分もかからぬツェーリングゲンに向かい、その宿に二泊することになった。このツェーリングゲンの名、フライブルクにはゆかりの人物の名で、千年近く前の侯爵の名だとか。当時、この侯の領地は、南に広がっており、現在のスイス北西部にまで及んでいたという。そのフランス語圏スイスに今もフリブール(Fribourg)の街がある。侯は自由を尊んでいたのか、ともに「自由の街」と名付けたわけだ。

宿に荷を置いて、夕飯を食べるために、再度車を出し旧市街までやって来た。そこで入

ったのが、百貨店のヘルティエ(Hertie)※1。デパートの最上階はこの地でも大きな食堂だった。セルフサービスで食事をテーブルまで運ぶと、温室のようなガラス張りの天井の向こうにミュンスターの見事な塔が迫っていた。この街のシンボルを借景とした仕掛けは、なかなかのアイデアだなあと思った。食後にそのミュンスター広場に下りると、幼い長男は水が噴き出す八角形の泉(Brunnen)に戯れ、広場の縁にあるベッヒレの流れを見て、思わずひょいとそれをまたぐ。そしてまたぎ返す。手をつけて、きれいな水をすくう。子どもの歓声が絶えない町なのだろうとも想像した。



写真3 シュパーベン門(クリスマス頃)

さて帰る段になって公共駐車場からレンタカーを取り出し、旧市街を抜けるシュパーベン門のところまで来た。その時どうしたわけか、信号待ちの列から出るため、まずはバックした。途端にガチャン！慌て者の私は闇の中に乗用車がいたのに気づかず、そのまま後の車のバンパーにぶつけてしまったのだ。すぐに外に出て、韓国製のヒュンダイに乗っていたドイツ人家族に謝る。明後日に帰国する旅程だったので、事故処理だの保険だのとトラブルになったらやっかいになる。そこでドイツ語を普通に話す妻の手も借りて、收拾を図った。とっさに 100 マルク紙幣を取り出し、相手に渡す。相手は「車検を通したばかりの車なのに」とこぼすが、結局、帰国が迫って

いる事情を理解してくれ、そのままで良しとなった。柄にもなくBMWのレンタカーを借りていたが、こちらは無傷で、相手の大衆車はへこんだ箇所がすぐにわかるほどだった。この時は、BMWの高品質を実感した次第である。

コルマールを往復する

翌日。昨日のことに懲りずに、予定通り車で西方のコルマールを目指した。今回の旅で唯一出かけたフランスの街だ。バーデンの州道をまずは国境の街ブライザッハ・アム・ライン(Breisach am Rhein)へと向かう。

そこでライン川を越えるが、90年に発効したシェンゲン協定※2により出入国管理及び税関の施設はすでになく跡地だけが残る。そこに何とマクドナルドが、広い駐車場を利用して『税関跡店』を出していた。向かいの銀行支店に立ち寄り、これから向かうフランスの通貨フランをドイツマルクと交換する。こうして準備が整い、ライン川にかかるコンクリート橋を渡り、フランスへと入った。

先へ進むと地図にヌフ・ブリザック(Neuf Brisach)の地名。すぐに気づいた。ドイツ語のブライザッハはフランス語のブリザックに当たる。しかもヌフはNew 新しいの意。こちらのブリザックは対岸のブライザッハから派生した街だった。言語境界ではしばしばこういうことが起こる。コルマールの街まではさらに半時間。途中にあるハイムだのガンツェンだのの地名はどう見てもドイツ語名だが、ここはれっきとしたフランスだった。

街には北側から入る。フランスの都市でよく見かけるシャン・ド・マルス(行進の広場の意)が駐車場になっており、そこに車を止め、赤ん坊の娘を妻がおんぶしてで出かける。不安なのはドイツと違い駐車料金を取るゲートがない。妻が道行く人に聞くと「ここはただ」と聞いて安心した。ただだけあって、砂利に

土ぼこりが立つ未舗装の空き地だった。

この街を訪ねた私の第一の目的が、歩いてすぐのウンター・リンデン美術館(Musée Unterlinden)だった。その昔、ドミニコ会の修道院だったという建物は、四角な中庭を囲む典型的な修道院建築の姿だった。その中庭に面した部屋に入ると、大きなワインの樽が並び、隣にはブドウを絞る道具が無造作に置かれていた。そう、ここはアルザス・ワインの産地なのだった。中庭に沿って歩くと、奥に礼拝堂だった広く長く天井の高い空間が現れた。ここに展示されたイーゼンハイム(Issenheim)の祭壇画をこの目で見たかったのだ。



写真4 イーゼンハイムの祭壇画

およそ五百年前、ドイツのヴェルツブルクに生まれたマティアス・グリュネヴァルト(Mathias Grünewald 本名はナイトハルト)は16世紀初めにはコルマールの川下、マインツの大司教に雇われ、多くの宗教画を残した。コルマールの南、イーゼンハイムにあった別の修道院の祭壇を飾る絵として、これは制作された。写真は厨子(ずし)を納めた扉絵なので、これが第一面と言われる作品だ。磔刑(たっけい)のキリストは精彩かつリアルに描かれ、その凄惨な描写は人に恐れを抱かせる。赤ん坊をかかえていた妻の足が止まり、こちらが作品を凝視する中、他の部屋へと急

いで去ってしまった。

私はせっかくだからと、別置されてある第2面にも目を通す。こちらは受胎告知の場面で凄惨さこそないが、マリアの光背や右翼に描かれたキリスト復活時の眩しい光は、何か幻想的で神秘的なものを感じさせる。全体としてドイツ人らしい突き詰めた描写といった感じだ。グリュネヴァルト自身もそうした性格なのか、折からの宗教改革に直面し彼が選んだのは、人民を救済するためのドイツ農民戦争への参加だった。当然、カトリックの大司教からは除け者にされた。農民戦争が領主側の弾圧で敗北すると、彼も以降は絵筆をもつこともなく歴史の舞台から消えて行った。晩期ゴシックの傑作とされる祭壇画の方は、フランス革命期にイーゼンハイムからコルマルへと移され、今日に至っている。

美術館の出入り口で私と長男は妻と娘に合流した。昼頃でお腹がすく時間となった。近くのパン屋で小エビが挟まれたバゲットなど、何品か買いそのまま道端で昼とした。片言のフランス語でお願いしマドモアゼルから手に入れたそのパンは、期待通り美食の国だけあっておいしかった。



写真5 プティット・ヴニーズ コルマル

コルマルは今日、アルザスの農業の集散地であると同時に、観光地としても魅力的な所だ。旧市街は木組みの家も多くまるでドイツのメルヘンの街のよう。違うのは観光客が

乗る芋虫のような電気自動車の列が、やたらと往来している点か。これはヴェルサイユ宮殿など、フランスで良くお目にかかる光景だ。そんな歩行者道を先へ進むと、プティット・ヴニーズ(Petite Venise=小さなヴェニス of 意)と呼ぶ水路が交差する一角に達した。鉄道が通る近代以前、物資輸送は舟を使って行われた。こちらはフライブルクと違いその運河が走っており、当然幅10m近くになるし水も淀んでいた。そこにかかる橋から眺めると、水面には数多の白鳥が群れており、それらを含めて被写体になると、どこにカメラを向けても絵になる光景だった。午後一番暑い時間を迎えているせいか、風がない市街はあまり心地よくない。そろそろ潮時と思い、例の駐車場まで歩き、コルマルを後にした。

フライブルクを描いた絵

その晩は、やはりフライブルクの旧市街周辺を歩き、ホテルチェーンのノヴォテルのレストランに入って夕飯とした。ランチョン・マットが紙のところは、日本のファミレスで食事をするような雰囲気だった。

そして旅の最後の日。この日は夕刻までにフランクフルト空港にたどり着ければ良いので、やはり半日はフライブルク観光にあてた。丁度、ミュンスター広場で市が立つ日で、賑わいの中を良いものはないかと物色した。まな板が並ぶ店があった。板を動物の姿にかたどってくれると言うので、妻は好きだった亀の形にそれをカットしてもらい、ご満悦だった。その足でミュンスターの中を覗いてみる。ここで疲れた足を伸ばして休憩。気がつくと、祭壇の上に若いシスターとその助手が立ち、聖書朗読を始めた。内容は、イエス・キリストが五千人に食べ物を与えるという奇跡物語の一節だったそう。私には、この後でシスターがギターを取り出しフォークソング調のアヴェ・マリアを弾き語りしたのが、特に印象

深かった。半月に及ぶ旅の最後で、少しセンチメントな気持ちになっていた。

この時の訪問で惜しくも行きそびれてしまった所。それは街の東側に鎮座するシュロスベルク(Schloss berg 城山の意)。その頂上に登れば、フライブルクの市街とその背景にラインの広大な平野の広がりを見ることができたはずだ。そしてあのミュンスターも、さぞかし美しく風景の中心になっていただろう。

おなじみ、東山魁夷画伯の作品に『晩鐘』と言う名の絵がある。薄暮の中にたたずむ大聖堂をこのシュロスベルクから描いたものだ。この項でも、その著『ドイツ・オーストリア - 東山魁夷小画集 - 』（新潮文庫）から晩鐘の一説を引用して、終わりとしよう・・・。

「金色に縁どられた雲間から幾筋かの光の足が、塔の真上に放たれていた。

巨大な寺院は、その姿を逆光の暗さに沈め、夕影に覆われたフライブルクの町に、高く聳えていた。」 了

※1 百貨店のヘルティナーは、フランクフルトを拠点にして、広く流通業を行っていたが、ドイツでも通販などの拡大でこの業態は厳しく、2009年をもって店を閉じたと、ドイツの海外向け放送「Deutsche Welle」のウェブ・サイトは伝えている。

※2 シェンゲン協定は、EU加盟国間ではその住民がパスポートなしで行き来できると定めたもの。よって国境の手続きは廃止となった。因みに、2002年正月に独仏共に共通通貨ユーロを導入したので、ドイツマルクもフランスフランもこれにとって代わられた。国境での両替はなくなった。



写真6 東山 魁夷 『晩鐘』